

回差点

4月初めの日曜日、東京の上野公園はにぎやかだった。散り始めた桜の下で、たくさんの花見の宴、語り合う人々、そろいの着物で踊る人たち、カメラを向ける外国人を見た。そんな

中、いたる所に大きなごみ分別袋が置かれていた。人があふれているにもかかわらず、路上にごみはない。中国語やハン

てくる。この情景を、外国の観光客はどう感ずるのだろうか、などと思いつつながら、東京都美術館へ向かった。その日はエル・グレコ展の最終日である。20年余り前、スペインのプラド美術

レンジに似た実の、鮮やかな色彩とともに、今も私の心によみがえってくる。館内に入ると、初めて目にする作品の中に何点か、あのとみに見たものがあった。これだけの国の威信をか

文化は平和の中に

館と、エル・グレコ終焉しゆうげんの地トレドで、たくさんの作品に出合った。中でもサン

タ・クルス教会美術館のアーチ型回廊でのデジャビュ（既視感）と思われる体験が、パティオ（中庭）のオ

けた文化遺産を、果たして信用のない国に貸与するだろうか。戦争の危険のある国に名画を持ち込むだろうか。日本は平和な国だから、そして、公園のごみの証しにある道徳性の高い国

であるから、そうしたたまたものだと思う。美術や音楽、文化は平和のメッセンジャーである。美に感動する心に国境はない。文化は平和の中にこそ生き、決して敵をつくらない。しかし、戦争は敵をつくり、破壊である。文化の価値はおとしめられ、人類が宮々と積み上げてきた精神活動を踏みにじる。いま平和を維持していくのは至難だが、未来につなげるために成さねばと私は思う。（松本市波田、古畑博子、63歳）